注意されたか書きました。教えていただいたことにまた今あらためて気づかされる、ということは多いです。レッスンの中心はもちろん、技術的なことも少しはあるのですが、どう表現するか、いかにきちんと人を惹き付ける演奏をするか、それがほんとに細部にわたって、どんな音色を出したいかとか、どんなフレージングにしたいかとか、自分で考えて演奏をするようにというアイディアをたくさんいただいたのが、彼のレッスンですね。

——2年間師事されて、濱田さんもリサイタルされるようになりましたね。

濱田　卒業してからは顔を合わせることが少なくなりましたが、お互いリサイタルが近づくと弾きあって意見を出したりするようになりました。私自身、ニューヨークで年に1回は必ずありましたし、他の都市、カナダなどでリサイタルがあるとき、彼に助言してもらったり、逆にケネスのを聴いたり(笑)とか、お互い聴き合うことはよくしましたよ。プログラミングって大事でしょ？今度こんな曲をやろうかなと考えたときの相談や、楽譜の貸し借りなどで今も交流は続いています。

前回の公演後、上野のレストランで。

——濱田さんの方からパリへは。

濱田　よく行きますよ。私のCDもパリで録音したので相談にのってもらいました。それこそレコーディングの日は毎日お昼ごはんを作ってくださいました。人間的にもとても温かい人です。

——彼の家で？いいですね。どこにあるのですか。

濱田　はい。ノートルダム大聖堂の近くです。

——チェンバリストはたくさんいますが、同じ演奏家として他の演奏家と比べ、どういうところがケネス・ワイスのよいところだと思われますか。

濱田　一番いいなと思うのは、人間味があふれる演奏ということです。演奏って、その人間の人柄を表わすものだと思うのです。演奏を聴いていると、彼の優しい人間性だったり、温かいところが音色に現われているなぁと思います。歌心あふれる演奏です。どうしてもチェンバロというと、リズミカルな部分を強調して弾く演奏家も多いのですけれど、そうではなくて、もちろんダイナミックなときもありますけれど、どんな技巧的な作品においても、長いフレーズを歌心を大切にしながら創り上げていくところはさすがだなぁと思います。

——私たちはレオンハルトをはじめ多くのチェンバロ奏者の演奏を体験する機会がありました。ケネス氏は指が早く回る技巧派というのではない。彼を2回招聘して、平均律もやったけれど、美しい音を出す人だなぁといつも感じます。響かせ方というのでしょうか…。

濱田　そうですね。私は習っているときに言われたのですが、それはケネスがレオンハルトから言われたことだそうなのですけれど、自分の出したい音のイメージがちゃんとないと、自分で繰り出す(創り出す)ことが出来ない、とよく仰っていました。本当に自分でこういう音を出したい、こういう音色を出したい、と常に一音一音しっかりイメージをもっておかないと、チェンバロっていうのは表現が難しい楽器なのです。歌うこと、旋律的に聴こえさせるには音色のイメージをちゃんと持つようにと言われたことが、やはり先生の演奏を聴くと良くわかりますよね。

——レオンハルトとケネスの共通点を感じられることはありますか。

濱田　楽器に対する真摯な姿勢、アプローチ、奇をてらうとかいうのではなく、作品に対して真摯に向きあうところです。

——楽器を選ぶことも大事なのでしょう。

濱田　もちろんです。よくない楽器からはいい音も出てきません。よい楽器との出会いがあり、自分がちゃんと反応できる。楽器の持つ良さをフルに生かせられるか、そこが優れた演奏家か否かの差だと思います。ケネスの場合は、楽器の持つ音色、パレットからすべてを表現することが出来る。自分の対応力、常日頃から自分の持っている優れた音楽性をコンサートで出し切れるかが重要だと感じます。

——今回のプログラムについて、聴きどころを。

濱田　「フランス組曲の第5番」はよく知られています。「フランス風序曲」は規模が大きくてバッハの構築性を堪能してもらえると思いますし、「半音階的幻想曲とフーガ」はとても技巧の華やかな作品です。バッハの作品の中でもバラエティに富んでいて素晴らしいと思います。フランスものはもっとあってもいいくらい。そう言えば、ケネスは去年と今年、クープランのプロジェクトをやっています。バッハは、フランソワ・クープランの曲を知っていて、アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽帳の中にもクープランの曲を筆写するなど、フランス作品の影響をずいぶん受けています。フランスのバロック、しかもクープランはその代表。ケネスならではの装飾音の入れ方とか、フレンチ・エスプリのきいた機知に富んだ演奏が愉しめると思います。

フランスの流れとドイツ的なものとの組み合わせがとてもいいのではないでしょうか。ケネスは「フランス風序曲」が大好きですから、ケネス・ワイス・ワールドが充分堪能できるプログラムだと確信します。

——ケネスを日本で聴かれて発見とか、感じたことはありますか。

濱田　1回目の来日時より2回目の方がお客さんとコミュニケーションが取れていたという気がします。前回、平均律という大きなプロジェクトでしたが、日本のお客さんは真剣に静かに集中力を持って聴いてくださるので、ケネスもそれに合わせて集中力がアップしてよくコミュニケーションがとれていたと感じました。3回目はもっとよくなることでしょう。

ケネスは兵庫県立芸術文化センター、東京文化会館小ホールともに気にいっていて、再訪を心待ちにしているようです。

——最後に現在のチェンバロ界について、いかがでしょうか。

濱田　いまはとても新しい風が入ってきています。ジャン・ロンドーのような若い世代も台頭してきて、チェンバロ界は盛り上がっています。とてもよい時代だと思います。その波に乗って皆さまにもチェンバロ音楽をたくさん聴いて欲しいです。

ジャック・デュフリ：クラブサン曲集
濱田あや(チェンバロ)

WWWCC-7784
(2014年4月パリ、ノートル・ダム・ド・ボン・スクール病院礼拝堂にて収録。)
発売元：LIVENOTES Nami Records Co. Ltd

[ケネス・ワイス チェンバロ・リサイタル 日本公演スケジュール]
2月22日(木) 19:00　東京　東京文化会館小ホール
24日(土) 14:00　西宮　兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホール
25日(日) 14:00　名古屋　宗次ホール